

アブラハムの生涯

## エジプトへ

飢饉

アブラムは神の召しにこたえて、妻のサライ、甥のロト一族郎党引き連れて故郷を旅立って約束の地カナンにはいりました。ベテルとアイの間の地に到着すると、彼は導いてくださった主に感謝して祭壇を造り礼拝をささげます。アブラムの旅は礼拝に始まり礼拝に終わりました。

さて天幕を張り、井戸を掘って、新しい地に生活の場を作ろうと一族が励んでいた矢先、この地をかんばんが襲います。どこまでも青い空にはひとひらの雲も見えず、ただ毎日灼熱の太陽が照りつけ、大地はひび割れ、割れた土は砂となって吹き飛ばされてしまいました。半遊牧のアブラム一族は、羊・やぎ・らくだどもに食わせる草にもこと欠くようになり、井戸をのぞきこめば水位は日に日に下がりつつありました。

こうなると一族の中からも不安なつばやきが聞こえてきます。「ご主人様についてこんな地にやって来たはいいが、ここで飢え死にか。」と。周囲には動揺を見せまいと努めているアブラムも、内心「はて、どうしたものか・・・。」と焦りを感じ始めました。故郷での安穩とした生活を棄てさせて、老若男女二千人をこの地に連れてきた族長としては、当然のことではありました。聖書にはこの時アブラムは祭壇の前で神を見上げて祈ったという形跡がありません。

アブラムは神を見上げるのではなく、周囲を見回しました。カナンの地の人々は、この地を飢饉が襲うと南のエジプトに避難することを常としていました。エジプトの地は大河ナイルに潤されていました。アフリカ奥地の熱帯雨林から水を集めて来るナイルは旱魃でも涸れなかったのです。

「やむをえまい。エジプトに避難しよう。」アブラムは、そう決断して約束の地を後にしてしまいます。

「私の妹だと・・・」

エジプトへくだる道、どこまでも無情なまでに青い空でした。けれども、国ざかいが近づくにつれて、アブラムの胸のうちに恐怖の雲がひろがりはじめました。アブラムは妻サライに言います。

「聞いてくれ。おまえはたいそうな美女だ。」

美女と言われれば悪い気はしません。確かにサライの肌は六十を越えた女とは到底思えぬはりがあり、物腰には成熟した気品と魅力がありました。彼女は『あら、こんな旅の途中に、この人はなにを言い出すのかしら。』といぶかりました。ところが次に夫の口から飛

び出したのはとんでもない言葉でした。

「サライ。好色なエジプト人は、きっとお前を欲しがって、私を殺すにちがいない。頼む。もし問われたら、私の妹だと言ってくれ。」

サライは返すことばがありませんでした。約束の地に旅立つときには、わが夫ながら、さっそうとして権威に満ちた族長アブラムにほれほれしたのですが、今は、妻の陰に隠れてわが身を守ろうとする、なんとも小汚い老人にすぎなかったのです。

神の約束をしっかり握っていたとき、アブラムは勇敢で、神以外に恐れるものはありませんでしたが、この世の人々と調子をあわせて、そそくさと神の約束の地を棄ててしまったとき、アブラムは神からの力を失ってしまったのです。

アブラムは信仰の父と呼ばれます。彼は信仰によって神にしっかりとつながっている時には、誰よりも勇敢で威厳があり、思慮深く柔和な人でしたが、ひとたび神の約束を棄ててしまうと、見る影もないほど臆病でちっぽけな人になってしまうのでした。そうであるだけに、アブラムを通して生ける神の偉大さが見えてくるのですが。

## エジプトで

夫が妬くほど女房もてせぜずと言いますが、サライの場合はそうではありませんでした。国境の検問の役人はただちにサライの美しさに目をとめました。ハム族とちがって皮膚は白く、高い鼻梁に、大きな深い瞳に長いまつげといったセム族のサライの美貌はエキゾチックでもあったのでしょう。

「この女はおまえの妻か？」役人たちは、問いました。「いいえ。わが妹でございます。」とアブラム。すると、役人たちはなにやら小声で話し合ってから、「都に居を定めるがよい。家に案内させよう。しばらくそこで待て、追って沙汰をする。」と言いました。

ほかの人々とは別扱いにされ、いったなにごとかとアブラムとサライは思いました。数日後、宮廷からものものしく輿がよこされて来ました。使者はひざまづくアブラムに権だかに言いました。

「アブラム。幸運な男。そちの妹はエジプト王ファラオのもとに仕えることになったぞ。よいな。ありがたく思え。」

サライをエジプト王の大奥に召しいれようと言うのです。

アブラムは奥に下がると、妻の目も見ずに、ことの次第を告げました。サライは青ざめ、ふるえる声で夫に問いました。「そんな。あなた、それでいいのですか。」すると、アブラムはくるりと背を向けて、「一族のためだ。」と低い声で言って、肩を落として妻の天幕から出て行ってしまいました。